



感情が爆発した子への言葉かけ

感情が爆発し、興奮している間は何を言っても聞く耳をもっていませんので、落ち着かせようとあれこれ話かけることは、ほとんど効果がありません。当たり障りのない単調な受け答えや言葉かけで良く、それ以上はむしろ火に油を注ぐことになりかねませんので控えます。

「くそっ！ アイツぶっ殺してやる！」

こんな乱暴な言葉であっても、興奮中は「ぶっ殺すなんて言ってはいけない。」などと咎める必要はありません。無視もしくは反発されて教師自身がいらつくだけです。

「くやしかったね」「嫌だったんだね」「そうかそうか」

「よしよし」「大丈夫大丈夫」「分かったよ」「〇〇室で落ち着こう」・・・

こんな限られた言葉で十分です。あとは、安全を確保しながら興奮が収まるのを待ちます。感情を爆発させて暴れることは、とても体力を費やし疲れるものです。中にはそのまましばらく寝入ってしまう子もいるほどです。

徐々に体の力が抜け、表情も険しさが薄れて落ち着いてきたら、まずは、子どもが「うん」と答えられるような言葉をかけます。

「落ち着いたようだね。心配／安心したよ。」

「苦しくて／イライラして／くやしくて、がまんできなかったんだね。」

「いつもの〇〇さんが戻ってきてくれて、先生嬉しいよ。」

そこから事情を問う際は、「なんで／どうして・・・したの？」と「なんで」「どうして」を強調した問い方だと、子どもは責められていると感じがして話しづらい上、「だって、・・・だったから。」と言いつけるような応答になり、教師と子どもとの間が緊張関係に陥りやすくなるため望ましくありません。

まず、「〇〇さんが気持ちよく過ごせるために、教えて欲しいことがあるんだけど、協力してくれるかな？」と、話すための心の準備をさせます。

その上で、「さっきは、何があったの？／何がそんなに嫌だったの？／何があなたを苦しめたの？」と興奮前に起こったことや、「本当はどうしたかったの？／どうなれば良かったの？」と、先の展開への意思や希望を尋ね、じっくりと耳を傾けます。

子どもの側の事情を、子どもの感覚で理解し、「そうか、・・・だったんだね。」と聴いて教師が分かったことを言葉にして子どもに伝えます。このやり取りを丁寧に行うプロセスの先に、今後はどうするかの話題となります（第7号・8号参照）。

特に、ASD（自閉スペクトラム症）やその傾向がある場合、その子に特有の感覚・認知・思考があり、パニックに至る経緯が他者からは分からないことがあります。その子の生きる世界を教えてもらうスタンスで理解を広げていくことが、興奮やパニックの予防に繋がります。

